

# 教員・学生による推薦図書

※推薦図書は図書館で貸出できます。

## 教員〈高松〉

### 楽園のカンヴァス

▶ 原田 マハ〈新潮文庫〉

1920年代に活躍した2人の画家、ピカソとルオーを巡る謎を、現代のキュレーター(学芸員)2人が追うミステリー仕立ての小説。展開などで若干少年ジャンプ的なところが見られる気がするが、その分(?)美術を知らない人でも非常に面白く読めるだろう。何よりも、全体を包んでいる著者の美術に対する熱い愛情が、そのような小さなキズはほとんど気にさせない。この時代は、その後の芸術史を決定した時期だと言ってよい。この小説を読んで少しでもそのようなことに関心を持つ人が出れば、とても嬉しい。

一般教育科教員 高橋 宏明

### 読んだら忘れない読書術

▶ 樺沢 紫苑(サンマーク出版)

皆さんは月に何冊の本を読んでいますか?私はだいたい月に3、4冊の本を読みます。時間がなくて読書できないという声をよく耳にしますし、自分自身も口にしてきましたが、本書を読めばそれが意味のない言い訳でしかないことがわかります。本を読むことが、いかに時間を節約し、人生を豊かにすることにつながるかを理解することができます。

本書によると、月に7冊の本を読めば、日本で上位4%に入る読書量になるそうです。大体4日に1冊のペースですから充分実現できそうです。いきなりは大変なので、とりあえず月に5冊を目標にしてみようと思っています。皆さんも目標をもって読書してみてくださいませるか?

機械工学科教員 吉永 慎一

### マイカーズのエコシステム 新しいモノづくりがとまらない

▶ 高須 正和著(インプレス R&D)

ソフトウェアの起業家が世界中からシリコンバレーに集まり、学生→起業家→エンジニア→投資家というエコシステムが構築されている。その流れはモノづくりの動きとしてハードウェアにも及んでいる。一方で、起業家が実際何をやって、投資家がどんな基準で投資をし、誰がどのように儲けているのか詳しく説明しているものは無い。この本の中では、第二のシリコンバレーと呼ばれ学生諸君もよく使っているiPhoneが製造されている中国の工業地帯、深圳を紹介している。高専生なら「ものづくり」魂に火が付き、深圳に行きたくてしまうそんな本である。

電気情報工学科教員 漆原 史朗

### 高速化プログラミング入門

▶ 北山 洋幸(カットシステム)

コンピュータープログラムの処理速度を向上させるための基礎基本と現代のプロセッサを持つ高速化の仕組みを解説した入門書です。画期的な魔法のテクニックを紹介する本ではありませんが、演算時間を意識しプログラムの処理速度を向上させるために役立つ入門知識が整理されています。処理速度のベンチマークは、たとえば「Cプログラム高速化研究班、片山善夫、USP研究所(ISBN:978-4904807057)」を参考に…。

機械電子工学科教員 平岡 延章

### ロンドン歴史図鑑

▶ キャシー・ロス+ジョン・クラーク、樺山 紘一訳(原書房)

このイギリスの首都ロンドン歴史図鑑書は、日本の江戸の歴史と類似する点から比較都市論が続ける二千年の歴史ある都である。そこには、ロンドンのテムズ川と江戸の隅田川に架かる橋の重要性において、近世の都市の大火災後に復興開発する経過の比較されている点もある。また、都市発展された上下水道の衛生面(疫病の流行など)において、徳川の江戸のあり方は、ロンドン、フランスのパリ等で比較されても世界の中で、優れた維持管理体制でした。この本は、18年前に他社出版されたロンドン歴史地図本と合わせて、日本と常に比較できる大型本の参考資料になる。

建設環境工学科元教員 松原 三郎

## 教員〈説間〉

### 幻惑の死と使途

▶ 森 博嗣(講談社文庫)

その名を呼べば、どんな状況からも脱出を果たす奇術師がショーの最中に殺され、しかもその遺体が消えるという謎に、国立大学工学部助教授・犀川と大学生・西之園師弟が挑むミステリーである。この謎解きだけでも面白いが、この作品の真価は「ものには名前がある」ことの意義に気づかされることにあり、私は鳥肌が立った。著者は私の前所属先の元工学部助教授だそうで親近感があるが、さらにその分身たる犀川は私のような物理研究者にとって重要な示唆を与えてくれる。例として彼の発言を「記号を覚え、数式を組み立てることによって、僕らは大好きだった不思議を排除する。何故だろう?」答えは作品中にある。

一般教育科教員 黒木 経秀

### 10年後、会社に何があっても生き残る男は細マッチョ

▶ 船瀬 俊介(主婦の友社)

これからの長い人生、身体が資本です。「筋トレ」の効果は、引き締まった体型、筋力増強だけでなく、脳の機能もアップします。記憶力、判断力、集中力が上昇し、勉強や仕事ができる頭脳になります。同時にメンタルも強くなること。「細マッチョ」になろう。私も目指しています。

通信ネットワーク工学科教員 横内 孝史

### 地方消滅-東京一極集中が招く人口急減

▶ 増田 寛也(中央公論新社)

### 地方は消滅しない!

▶ 上念 司(宝島社)

本校の卒業生は地元就職が多いように感じます。これからも香川に住むからには、自分の町の将来のことを考えなければいけません。1冊目は衝撃的なタイトルと内容ですが、非常に勉強になる本です。2冊目は1冊目に対する反論本です。公平な視点を持つためにも2冊とも読むことをおすすめします。

電子システム工学科教員 藤井 宏行

### 日本語が亡びるとき-英語の世紀の中で

▶ 水村 美苗(筑摩書房)

グローバルという言葉が企業や学校教育で重要な指標を示す言葉となったところから、多くの人は日本語と英語の関係や役割について、悩み、いたずらに苦勞し続けています。水村美苗さんは日本の小説家ですが、青年期をアメリカで過ごし、しかしながらアメリカや英語にまじめではありません。彼女が体験を通し、日本語をどのように考えたらよいかを示したのが本書です。英語の授業や国語の授業で悩んでいる皆さん、気分転換に本書をお勧めします。

情報工学科教員 松下 浩明

## 学生〈高松〉

### 下流志向(学ばない子供たち、働かない若者たち)

▶ 内田 樹(講談社)

「近頃の若い者は仕事ができない」よく聞く言葉である。正確には、「与えられただけの仕事しかできない」ということらしい。私の中学校時代の先生が話していたことを思い出した。「ある掃除の時間にね、教室を掃除していた生徒に廊下も箒ではいておくようにお願いしたんだ。そしたらね、『廊下は私の担当じゃないからやりません』ってきっぱり断られたんだよ。驚いたね。」とっていた。そういった経験は、皆さんあると思う。どうして子供にそういった考え方が備わってしまったのか。著者はこの本の中で幼少期の「おつかいの経験」に原因があると指摘している。お手伝いをすれば褒められる、という経験よりも先にお金を払えば自分のような子供でもサービスの対象になるという資本主義的経済経験をすることが問題なのだろう。著者のほかの論同様、一部極端な考え方があがるが、大部分は一理あると思いつつ読んで。仕事をやるにあたって、あるいは将来的に子供を育てる時に多少なりと参考になる情報ではないかと思う。

機械工学科4年 富田 想

